



令和元年 (2019年) 10月 24日 (木)

No. 15038 1部377円 (税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会

東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)

郵便番号 104-0061

[電話] 03-3535-3052

[FAX] 03-3567-4671

近畿支部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4

(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ポータルサイト <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

●知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ月32,400円
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

目次

☆地域における観光と知的財産の関連性 (43) … (1)

地域における観光と知的財産の関連性 (43)

東京理科大学経営学研究所

教授 生越 由美

第5章 地域における事例

40. 山梨県甲府市 (商標権、遺産資源)

山梨県は本州の内陸部にある地方自治体であり、県庁所在地は甲府市である。全国の県庁所在地の中で人口が最も少ない。今回は甲府市を検討する。

甲府市は、2000 (平成12) 年11月1日に「特例市」に指定され、2019 (平成31) 年4月1日に「中核市」に移行された。

この甲府市は2019 (令和元) 年に「開府500年」を迎えた。このシリーズの最後を飾る都市として、「開府500年」に敬意を表そうと思った。今回はこのシリーズのまとめを記したい。

1. 地理

甲府市の形は三日月形とかなりユニークだ。甲府市は甲府盆地の中央部を南北に縦断する形で位置している。甲府市の周囲は、奥秩父山塊、御坂

ご相談お待ちしております！

技術翻訳
担当です。

特許翻訳
担当です。



<http://www.toyota-td.jp/business/ip/>

特許/技術 翻訳・通訳

trans@ml.toyota-td.jp

TTDC, your language specialist

山地、南アルプスなどの山々に360度囲まれている。

市街地の中心は甲府盆地の中央北寄りに位置している。市街地中心の標高は約250～300mである。甲府市内で一番低い地域は市域南部の笛吹川付近の標高約245mであり、一番高い地域は長野県川上村との境界にある金峰山の標高2599mと、1つの市内で2350mもの標高差がある。

山梨県は首都圏整備法上の「首都圏」に属し、位置関係から関東地方との関連性が高い。

図1：山梨県甲府市の地図



2. 地名の由来¹

「甲府」という地名は、1519(永正16)年に甲斐国の守護大名の武田信虎が、「石和(現：笛吹市石和町)」、「川田(現：甲府市川田町)」、「躑躅ヶ崎館(つつじがさきやかた、現：武田神社＝甲府市古府中町)」へ住み替えた際に、「甲斐国の府中」という意味から「甲府」と命名したとされる。府中とは、国の政治・経済・文化の中心地という意味がある。ただし、「甲府」という名称が定着したのは、近世になってからとのことである。

3. 歴史²

甲府市内には旧石器時代の遺跡は見当たらない。しかし、相川河床からナウマンゾウの臼歯化石が発見された。これは山梨県内で2例目だった。

縄文時代早期の遺跡は甲府市内に分布している。山間部では早期からの遺跡や遺物がある。

甲府市域への本格的な定住は弥生時代以降であると考えられている。弥生中期の高町遺跡は集落遺跡で、祭祀遺構・遺物、墓域などはない。上石

田にある上石田遺跡には定住痕跡が見られ、内陸部の河川・湖沼における漁業に用いられた土錘なども出土している。弥生後期では荒川扇状地の榎田遺跡が発見されており、住居跡や方形周溝墓などが見つけられている。この榎田遺跡からは、東海系や北陸系などの特色をもった土器が発見されているため、複数経路で導入されたと考えられる。増坪遺跡から炭化米が発見されている。稲作がなされていた証拠である。

律令制下では、「巨麻郡」や「山梨郡」に属した。古代甲斐国の有力豪族は早くから畿内王権と関わりをもち、甲府盆地の東部では仏教文化を導入した。寺本廃寺(笛吹市)など古代寺院が建立された。甲府市域では、川田瓦窯跡や土器遺跡などに土器や瓦を生産していた施設がみられる。甲斐国分寺をはじめ盆地東部の古代寺院へ屋根瓦が供給されていたと考えられる。

また、和戸町の桜井畑遺跡には8～9世紀の小規模な寺院跡が発見されていることから、盆地西部へも仏教文化が浸透していたことが分かる。霊山として知られる「金峰山」には山岳信仰を示す信仰遺跡がある。

平安後期になると、常陸国からきた源清光の子孫が甲斐盆地各地に進出し、「甲斐源氏」として発展した。この時代は、各盆地で荘園が成立し、甲府市小瀬町周辺に成立した稲積荘には、甲斐源氏の一族である加賀美氏や小笠原氏らが進出し、市域南部の低湿地の開発が進んだ。

平安時代末には武田信義が甲斐源氏を統率し甲斐の支配を固めたが、市域にはその子一条忠頼と板垣兼信が館を構え、源頼朝の源氏挙兵にも参加して活躍し、鎌倉幕府の創設に寄与した。

戦国時代になると、甲斐国の中は乱国状態となるが、守護武田氏による国内統一が進められ、武田信昌は甲府市川田町に川田館を構えた。1519(永正16)年には、武田信虎が古府中に「躑躅ヶ崎館」を築き、家臣団を集住させて新たに城下町が形成した。古府中は信虎・晴信(信玄)・勝頼と3代にわたり、戦国大名化した武田氏の領国支配の本拠地となる。また、1520(永正17)年に信虎は躑躅ヶ崎館の詰城として「要害山城」を築城した。翌年の11月3日にこの要害山城で嫡男の「晴信(信